

近世文人の内面

— 上田秋成の人と文学 —

短期大学部 田川邦子

(1)

上田秋成の父は、格式の高い旗本・小堀家の人でしたが、不行跡な逸脱行動が多いため、まともな江戸城出仕も危ぶまれ、領地（大和）に蟄居させられた人だと言われています。

いわば社会の秩序からドロップアウトした人で、父と母の関係も、正式な結婚ではありません。父母の密通から生まれた私生児が秋成だったのです。秋成の誕生前に父は早世したようなので、秋成が「父無し、その故を知らず」と言わねばならないのは、自然のことでした。

実母は秋成が四七歳の年・安永九年までは生存していたことが分かっています。秋成六七歳の折、先立った妻や親たちを供養するため一文を草し、檀那寺実法院（京都）に納めていますが、それには実母の没年をも記し、「実母只一面のみ」とも書いています。「四歳母亦捨」は、七五歳の折の「自像筈記」の記ですが、これらによれば四歳の時母に捨てられ、その後は「一面のみ」で、行き来はないが、居場所が全く分からない状態でもなかったようです。

なぜこのように出生の秘密に拘泥するかといえば、上田秋成の文学には、“自分は何者なのか、自分は何処から来たのか”の深い問いかけが、常に根底にあるからです。怪談文学『雨月物語』『春雨物語』の作者として、上田秋成は有名ですが、秋成の怪談はタダの恐い話ではありません。まず闇を見つめる眼差しが深いのです。その闇の中から現われる異形のものたちは、皆人間の業に深く傷ついております。こういう闇の見つめ方、人間の業を見つめる思いの深さは、彼が負った出生の秘密と深いかわりがあるように思えます。“自分は何処から来たのか、自分は何者であるのか”の凝視からはじまり、それがさまざまな人間の性（さが）のありように、拡大敷衍されて行くわけです。

「四歳母亦捨」は四歳の時実母の手を離れ、大阪堂島の紙油商の上田茂助の養子になったことをいっています。この上田家ももとは武士で、養父母共に慈愛深く、秋成は大切に育てられたようです。

五歳で悪性の天然痘に罹り、命も危ぶまれた時、養父母の必死の看病で九死に一

生を得ました。父は大坂の加島稲荷を篤く信仰しており、この神に必死に祈ったところ、神が茂助の夢枕に立ち、“本来なら死ぬ命であるが、お前の必死の願いを聞き入れ、息子の命は助けよう。さらに六八歳の寿命を保証しよう”との夢の託宣があったといひます。それを境に、秋成の病気は快方に向かいました。

神の特別の加護により助かった命ですから、神への感謝を忘れないようにと、養父茂助は秋成に常に語っていたようです。秋成が加島稲荷へ度々足を運び、神主とも深く交際しているのはこのためで、神から与えられた〈六八歳〉を生涯強く意識していたふしがあります。実は六八歳になっても死なず、七六歳まで生きたのですが、六七歳になる頃には、かなり本気で死を見つめていた形跡があります。

その頃はもう妻を始め全ての親族を失い、全くの天涯孤独でした。先に亡くなった養父母や妻、妻の母親、実母までを含め、六人の故人の供養を改めて実法院主に依頼しているのも、死を意識しての心の準備といえるでしょう。

実法院主に贈った文章には、秋成の晩年の境涯と心境が綴られ、悲痛そのものです。

考懶元年不遇薄命、実父生死ヲ知ラズ、実母只一面ノミ。養家ニテモ母二人之レ有り、後母ノ意ヲトリカネ、不孝述ブベカラズ。遂ニ回禄（火災）ニ家ヲ失ヒ、産ナク居ナク漂泊凡ソ三十年、今ヤ郷土ヲ離レ、六親ニ別レ、狂蕩（愚かにほしいままに生きていること＝筆者）云ベカラズ。剩ヘ盲児トナリテ、他ニ糊口スルコト（他人の厄介になること＝筆者）、天下ノ恥コレヨリ大ナルハアラス。死ナントスレドモ能ハズ。無味ノ筆硯ニ煩ハサレテ、是亦世ノ猜忌ヲ被ル（つまらない文章でも書かずにはおれず、それがまた世間のねたみを買っている＝筆者）。為ス所スベテ一事ノ善事ナシ。今度漸ク覚悟ニテ万事廃棄、只々閑然トシテ死ヲ待ツノミ。

そして最期の時と場を求め、放浪の旅に出、例の加島稲荷に翌春まで滞在します。これに続く六八歳も、また特別の年でした。

秋成は大坂生まれの大坂育ちで、氏神も大坂の天満宮でしたから、晩年京都に移り住んでも、毎月一日には北野天満宮へお詣りは欠かしません。六八歳の十二月一日は、格別の思いをこめて参詣に出向いたのですが、通り馴れた道であるのに途中で方向感覚を失い、迷いに迷って遂に北野に行き着くことが出来ませんでした。

雨の降りしきる暗い一日で、疲労困憊し、夕方漸く加茂川近くの住居に辿り着き、そのまま2日間ほど眠り続けたといひます。これは我ながら不思議な体験であったらしく、「北野加茂に詣づる記」にも書き、また最晩年の随筆集『胆大小心録』にも

記しています。

前の年から死を見つめ、思い続けて、行き当ったのは自分の業の深さ、罪の深さです。それは何かといえば、実法院主宛の文章にも見えていましたが、〈書く〉ということについての罪の意識と業の深さです。

その年の十二月二四日、再度天満宮に詣でますが、その夜不思議な童子が枕上に立ち、西方を指して「汝休せよ」と言って立去ったといひます。これもまた秋成の意識下にあるものを、よく表わしています。

自分は有名になりたくて拙い歌や文章を書いているのではない。ただどうしてもこれだけはやっておきたいと、心に誓ったことだけは叶えて下さいと、神に祈って来たのに、「休せよ」とはどういうわけか、と秋成は悩みます。これはもう役に立たないもの一切は止めにする他はないと、翌年天神様の九百年祭に献詠する予定の百首歌も中止し、松と梅を詠んだ二首のみを捧げました。草稿五束を井戸に投げ棄て、それで少し気持が落ち着いた（『胆大小心録』）なども、その延長にあったことでしょう。

書くということ、表現することに罪の意識や抑制感を持つのは、近現代人には分りにくいことです。“表現は美德”の通念は、現代社会の隅々にまで行きわたっています。今の時代一日に何百冊の新刊本が出るなどその証でしょう。

しかし秋成の生きた近世・江戸中期の社会は、そのようなものではありません。文筆が正業として社会的に認知されるようになるのは、早くとも滝沢馬琴が活躍する文化文政期の頃で、江戸時代も末期に近づく頃です。文を綴り歌を詠み、俳諧に遊ぶなどは当時の通念では“遊び”であり“慰み事”なのでした。ですから武士にしても町人にしても、自分の勤めや正業は別のところに持っていて、文章は余暇に楽しむ世界だったのです。

上田秋成も、医者や学者の家に生まれれば、少し事情は違っていたかもしれませんが。これらは知識人の生業として認知されていた数少ない職業で、文筆の業と比較的矛盾なく同居できたからです。しかしこれもまた一面的な見方でしょう。事実養父茂助から受け継いだ紙油商を廃業した後、秋成は医学を勉強して医者になり、成功しますが、これも長続きしませんでした。

秋成が、“業”のように取りつかれていると自覚する、“書く”或いは“表現する”ということについての深刻な罪悪感は親から受け継いだ生業を失った、ということにも関係していると思います。男児の無い上田家に養子として迎えられたのは、家業の後継者としての期待があったからです。秋成の資質は商売には向かなかった

と思いますが、それでも養父の没後十年は頑張り、この間世間に交わり、世の中のありようをも経験したと思います。廃業に追い込まれるのは、明治八年・三八歳の時に火災に遇い、家産を失うからで、秋成の力量では再起不能だったわけです。

やるだけやったのだから仕方がないという冷静な自己認識は幾つかの選択肢が許される近代人の、生き方の自由があつてこそです。

故郷を去り六親を離れ産業なきものは狂蕩の子と云ふ

が、秋成が度々繰り返す自責の言葉で、この背景には、先祖の遺訓を守り、親の遺志を継いで家業に励むのが、人間のまともな生き方だとする、前近代の共通認識があるわけです。

(2)

秋成が深刻な意識で迎えた六八歳前後ですが、彼の創作意欲は、この段階になつても一向に劣えません。むしろ“書く”という業に取り付かれ、それに苦しみつつ、『春雨物語』の草稿も、この頃から着手されます。一応脱稿したのが七五歳、死の枕元にその草稿があつたと云いますから、死の間際まで校正を続けていたものと思われれます。

『春雨物語』と同時期に(七一歳)に書いた文章に「暁時雨」があります。これは空想的幻想的散文とも云えるものです。内容を簡単に紹介します。

十月のある夜、物思いに耽けるうち夜明け近くになってしまった。少し戸を開けると、外はまだ暗く、雨も降っている。そこで秋成は歌を一首吟じます。すると狭い庭隅から、歌の返しが返って来る。恐ろしくなつて戸を閉めると、やがて窓の外は白くなり、夜が明けます。すると鶯が飛んで来て、先ほどの庭隅からの一首に、歌を返します。庭隅に居たのは石蛙の置き物で、秋成が何時か友人から貰つて来た物です。この石蛙と鶯の間に対話が交わされるのです。よく聞けば、秋成の批判をしている。「この庵の主人は世間の濁りを避け、自分だけは清く潔く生きたいと努力しているかと思えば、出掛けて人交わりをし、その度に後悔し、愚かな心の煩いにとりつかれている」というようなものです。

鶯が飛び去り、今度は秋成と庭石の蛙がさらに対話を重ねることになり、秋成は、蛙の批判に耳を傾けます。その内容は「世俗の濁りを嫌い、極端に潔癖であろうとして、却つて自分を苦しめ、心の乱れの原因になっている。世事のいっさいを忌み嫌うというのは、心の驕りに他ならない」というようなものです。

これは秋成の晩年の生き方の、ある意味では弱点を衝いている言葉です。こうい

う言葉を庭石の蛙に言わせている。

昼間でも夜でもないその境界（さかいめ）の夜明けという時間に、鶯と石蛙との対話を聴く—これは考えるのに疲れ果てて、精神が朦朧としている折に起る幻聴であったかも知れません。北野にお詣りしようとして遂に行き着けなかった、あの経験を考え合わせても、一点に精神を集中すると、現実感覚が稀薄になり、別世界に入り込んでしまう。上田秋成にはこういう資質が確かにあったようです。これが彼に言わせれば、狐や〈わずらわす神〉が取り付いた状態であるということになるのでしょうか。

ただこういう異常体験や、幻視幻聴の中にあるものが、現実から遊離した別天地、夢のような桃源郷などではありません。自分は何者なのか、また何者であろうとしているのか—。それが異常体験の中にも、いつも自問自答されている。〈個我〉のありようが問われ、自己凝視の厳しさの中から、人間の〈業〉のようなものが、さまざまな形をとって見えて来るわけです。

『春雨物語』は10篇の短編から成る小説集ですが、その一つに「目一つの神」という作品があります。

相模国“こよろぎの浦”という地名がまず出てきます。大磯から国府津にかけての海岸の古い言い方で、歌枕にもなっています。都から見れば、「阿孀（あづま）の人は夷（えびす）なり。歌いかでよまん」など言われても仕方ない田舎です。この地で育った一人の若者が文学にあこがれ、和歌を学ぶために京都に上る決意をします。両親を説得し、遊学を認めてもらい、心も勇んで東海道を上って行きます。

明日は都へ着くという前の晩は、宿をとりそこね、近江国の老曾森に野宿します。

森の中には朽ちかけた小さな神社があるのですが、危くて昇ることができません。それで松の大木の根っこの、落葉の積った辺りを寢床に、一夜を過すことにしました。

するとそこに異形の者たちが現われます。天狗の顔つきをした神主、山伏、狐女房、童女姿の白狐などです。天狗の顔をした神主が神前に進み、祝詞をあげると、朽ちかけた神殿の扇が開き、目一つの神が姿を現します。髪は顔まで下りほうぼうで、目は一つ、それが光り輝いています。口は耳まで裂けているのに、鼻はあるか無いか分らない。藤色の袴を穿き、右手に羽扇を持っています。

神主の後からついて来た山伏は、この土地を通るついでに、目一つの神に挨拶をしたいと願い、供物を持参して、神主の案内でこの神社までやって来たらしいのです。やがて山伏の持参する供物を酒の肴に、目一つの神を囲み、異様な酒宴が始まります。

相模から来た若者は、恐ろしくてたまりません。木陰に身を縮めていますが、目一つの神に見つかってしまいます。神には、若者が何を目的に都に上ろうとしているか、もう分っているわけです。

目一つの神が若者に説き諭す言葉は、次の二点です。「都に出て物学びをしようと考えるのは時代おくれで、師となるべき人は、都にはもういない」ということ、「全ての学問や技芸に秘伝などない。文を書き、歌を詠む道（文学のこと）は、その人の心一つで会得するもので、教えの通り進むものではない。自分の道を切り開くには、自分で手探りして行く他には、どこにもよい方法はない」の二つです。これは秋成が日ごろ口にしてしている持論です。京都に居を移してからの秋成が、あまりにひどい貧乏暮しでしたから、心配した親友の小沢芦庵が、生活のために弟子を取り、歌の添削などしたらよかろうと、しきりに勧めましたが、秋成ははっきり断っています。

つまりこの目一つの神は、秋成自身の自画像なのです。「目一つ」というのも、勿論「一目小僧」など、よく知られた妖怪もありますが、秋成自身五七歳頃から眼病に罹り、目の病には苦しみます。『春雨物語』を書く晩年には、左の眼しか見えなかったので、「目一つの」状態にありました。

見た目には気味悪く、怖くて恐ろしい神ですが、田舎出の若者には意外に親切で、教え諭した後には、「酒のめ、夜寒きに」などと、しきりにお酒をすすめます。

結局若者は神の諭しに従い、都に上るのを止め、故郷に帰ります。

狐女房や天狗など、奇怪な眷族神を引き連れて登場する、これまた恐ろしくグロテスクな「目一つの神」は、結局秋成自身の姿であったのです。

『雨月物語』の豊雄（「蛇性の姪」の主人公）の中にも、秋成は若い頃の自己の姿を潜ばせていました。それは蛇の化身である魔性の美女に、限りなく惹きつけられる青年の姿でした。

秋成の怪談の中には、このように、自己像をひそかに潜ばせるものが必ずあること、これが他の怪談文学と違うところです。

己が何者であるのか、生涯問い続けた秋成らしい特色といえます。

（本稿は公開講座の一部を、加筆修正したものです。）